

講 演

平 和 と 教 育

名古屋大学学長 飯 島 宗 一

ただ今御紹介をいただいた飯島でございます。私はいろんな意味で平和のことを考え、あるいは大学に奉職をしているという立場から、教育ということも考えないわけにはいかないということで、いろいろ思いつきますことをあちらこちらでお話をしています。ちゃんとしたレジメを書けという御要求もあったのですがあまり整然としたあらかじめのレジメを省略致しました。

さて、今私どもが平和ということを考えるというのは、将来の人類の社会が基本的には、戦争を回避して平和な状態の中でこの地球という比較的狭くなった宇宙船の中で、お互いに助け合って暮らして行くことが実現できなければ、人類の滅亡、あるいは人類社会の破綻は、現実問題として非常に近くにあると考えなくてはならないからです。そういう点から考えますと平和というものは、古来人間社会の理想でありましたけれども今や理想ではなくて、それぞれの与えられた人生を今後全うしていくための絶対に必要な条件になってまいりました。そこで平和というのは、我々が生きて行くということとほとんど同じ意味をそのことばの内容が持つようになってきました。また教育というものも、生きて行くうえに必要な知恵であり、行動の源泉であり、あるいは人間としての確立ですが、その教育も所詮は、人間あるいは人間社会が将来に向かって豊かに生きるということを目指している営みです。

そういう点から考えると、平和や教育あるいは生きるということばが今の時代では、バラバラではなくてひとつのものを指し示すようになってきたのではないのでしょうか。ひとつには、戦争の手段というものが、1945年8月6日に広島に原子爆弾が投下されて以降、非常に激しい巨大な破壊力を持つように変化してまいりました。現在ではもし原子爆弾が実際に作動するという段階になってくれば、この地球上の全人類、すべての文化的文明的な財産というものを、一挙にして吹き飛ばしてしまうことが可能なほどでしょう。これは事実であり、従ってその巨大化した軍事力を前に、もしひとたび戦争という状態が起これば、確かに可能性としては、われわれ人類は元も子も無くしてしまうに違いありません。そしてまた、戦争にうったえてどこかの国やグループが勝ち得るものと考えてみますと、もう軍

事的行動における勝利敗北ということが、そのコストに見合ったプラスを戦勝国にもたらすわけではないでしょう。むしろ、お互いの疲弊破壊ということの方が非常に強くて、その面から言っても、戦争によるところの物事の解決というのは、もはや採算がとれなくなっていることは明らかです。それにもかかわらず、われわれ人類社会の中には、絶えず平和を脅かす要素というものが存在しているわけですが、その状況の中で私どもに必要なことは、人間としての行動の中で、戦争を回避して平和のうちに未来を開いていくことであろうと考えられます。

そこで私は、今地球上のすべての人間が、平和という問題について否定的、あるいは反対的であり得るはずがないのではないかというふうに考えております。事実、先程広島におけるシンポジウムで国際連合が一生懸命になって平和の維持に努めており、ユネスコも平和の問題については、非常に積極的な行動を展開しているわけなのです。

このたびの広島での、世界教員連盟の企ても、ユネスコとの密接な関連のもとで展開されているひとつのことからであります。最近では、ユネスコが世界各地毎に地域を分けて、軍備を縮小し、そして軍備を撤廃して、世界を平和にしていくための教育を大学や初等中等教育のレベルでどういうふうに進めて行けばいいかということについてのシンポジウムを継続して世界の各地で開いております。

アジア地区では、つい最近バンコクで、この軍備の縮小ということのための教育をどうするか、ことに大学のレベルで軍備縮小の教育をどうするかというユネスコ主催の、トレーニングコースが開かれまして、日本からは、広島大学平和研究所の所長の栗野さんと、東京大学の坂本教授のおふたりが助言者としてその会に御出になりました。そういうふうに国際的なレベルでも、いかにして平和というものを維持し、達成するかという努力は、毎日非常な熱心さをもって進められています。先月の半ば過ぎには、私は法王庁のバチカンに行って参りました。法王庁の科学アカデミーが主催を致しまして、世界の各国のアカデミーの代表を集めて、反核平和維持のための科学者の任務ならびに宗教者の任務という問題についての検討会を開催し、それ

に出席しました。そこで、世界の人々に訴えるステートメントを採用し、これを臨席された法王にさしあげました。これも、極めて世界的なレベルで熱心に進められているところのひとつの平和への動きであります。

つい数日前、アメリカのカソリック教会が反核平和の問題についての教書を出すということで、アメリカにおける社会的影響が非常に大きいと報じられていました。カソリック教会を中心とするこの動きが、どういふふうになるのかわかりませんが、ウィーンの枢機卿から私のところに、この問題について更に継続して検討したいから、できればウィーンへ来ないかという手紙を頂戴しているわけです。

また、私も医師の仲間では、世界中の医者が一堂に会しまして、もしひとたび核戦争ということが起これば、とうてい医師としての任務を尽くすことはできない、だから何としてでも、その戦争を回避して、平和のうちに医師としての職業、つまり人を助け人を生かすという仕事が全うできるような世界の条件というものを、是非保って行きたいということで、そういう会が開かれたわけです。

米ソの激しい対立、核戦争の危機、フォークランド紛争など、世界中に危機的状況があればあるだけ、何とかして平和を維持して行かなければならないという動きが広がってきているということは確かです。しかし日本はそういう世界的な動きの中で、ややもすれば取り残されて、視野が非常に狭くなる可能性があります。そして、大国の動きの中に対応するというだけで、大きな世界の運命というものに対する自分達の責任というものを自覚しないのではないのでしょうか。日本がかって大東亜戦争に突入をしたその最大の原因のひとつは、世界の中における自分達のポジションというものに対する認識が的確でなかったということ挙げなければなりません、同じような傾向が現在の日本社会の中に無いとはいえず、非常に心配です。やはり世界に目を開いてわれわれの将来、世界の将来を考えなくてはなりません。

たまたま私はカソリックの人と話をすることがあり、その時に、彼らは「われわれが世界の平和の問題を考えるのはあたりまえのことだ。なぜならば われわれは、常に世界全体の運命というものに対して、非常に切実な関心を持っているんだ。つまり、世界の運命に対して、自分達はひとつの責任を持っているという意識がある。だから今、平和という問題について、新しい法王がイニシアティブをとるというのも、不思議なことではない。同じ意味で、日本の宗教家も責任を感じていると思うから、しかるべき宗教家を紹介してほしい。」という話をしたのであります。その話を聞いた時私は、やはりわれわれ日本人は、世界人類の運命に

対して責任を持つ国民であるという意識が非常に乏しいと思いました。学問的や産業、経済の面で、日本は既に大国であるというふうに客観的に見られるようになりました。しかしどうしてもわれわれの、日本の国民の歴史と生活というものにちゃんと足を踏まえて、しかも、同時に世界人類の有力な一員として、世界全体の運命に対してひとつの責任を持つというふうな形の意識のあり方というのは、残念ながら日本には非常に乏しいわけです。ユネスコや世界教員連盟か軍縮シンポジウムを開くというと、日本のユネスコ国内委員会や文部省のお役人達は、世界的なレベルでの物事の動向、日本人の責任というものの観点から判断をするのではなく、あれは日教組の仕事だというふうに心配いたします。つまり、世界の現在の理性のレベルから見れば、小児に類する意識を残念ながらわれわれ日本人全体というものは、脱却をしていないのです。これは、私は、いろんな意味において危ういことであり、また結局、日本人が、真の意味で世界の国民の尊敬と敬愛というものをうける所以ではないと思うのです。

バチカンへ参りました次の週に私は、フィリピンの大学と名古屋大学とがもう少し仲良くいろんなことを交流できるようになるためにフィリピンに行っていました。そこで私が見て来たことの中で印象的であったのは、フィリピン大学のすぐ近くに国際米研究所という国際的なお米のセンターがあります。これは、世界各国がお金を出し、世界各国の学者が集まって、東南アジア型のお米の研究をしています。そこには、非常にたくさんの各国の人々が集まって研究をし、また、各国から若い人々が集まって、いろんな講習を受け、教育を受けております。その営みを見ておると、確かに平和的な国際協力というのはこういうものだということが、実感としてわれわれの目の前に浮かんでまいります。そして、実は、その国際的なお米の研究所の成果によって、東南アジアを中心とする国々のお米の収穫量というものは、非常に飛躍的に増大をしました。かって、戦争というものは、勝てば、賠償金をよこせ、領土をよこせと言って、富を獲得するところが、非常に大きな目標であったわけです。しかし、われわれは今、戦うのではなくて、平和的な協力によって、東南アジアにおけるお米の収穫量というものを飛躍的に増大せしむるというプラスを得ているのです。

こういうことは、お米のことばかりではなくて、われわれの生活しているあらゆる面で、国際協力というものが進んでいます。名古屋大学でもあらゆる学部の先生方が、よく考えてみるとすべて国際協力のネットワークの中で仕事をしていらっしゃると言っても言い過ぎではありません。たとえば、つい最近も、水のこ

とを研究している水圏科学研究所のことが、新聞等に報じられました。ここでは、世界各国の専門家と協力をして、地球上の生産、生活あるいは自然、あらゆる面において最も基本的に重要な要素である水というものについての情報を、日々地道に観測をして、そのデータを交換しあって、そしてこの大事な地球をはっきりと認識しながら、人類社会のために役立てていこうという仕事が、日常始終行われています。

そういう点から考えますと、目に見えない平和への方向、国際的な方向というもののが極めて明らかであって、私どもはそれを認識しなければなりません。

また、教育と平和とは、基本的にはふたつの概念、ふたつのことばではありますが、今やその根本において、ひとつのものを指向していると言わなければならないように思います。軍縮教育とか平和教育というテーマが、教育の世界にも出てまいります。これらについては、いろんな学校のレベルで平和教育のメニューやカリキュラム、教え方などが、研究をされ討論されています。さらに、国際理解教育についてのプログラムや教え方や考え方というものについても、さまざまな報告があり、実践があります。しかし私は、結局のところ教育と平和とはひとつのものになるべきものであって、どんな部分のことを教育が取り扱うにしても、平和の問題から離れることはできないように思います。その意味では、軍縮教育とか平和教育とか銘を打ったある行動だけが大事なのではなくて、むしろこのわれわれ人類が置かれている現在の状況の中で、教育の原点はどこにあるのか、という所まで立ち返るところに、平和意識の問題というものは投影をしてくるのだ、と考えざるを得ないように思うのです。

実は最近、高等学校の生徒諸君といろいろ話す機会を数回与えられまして、ある高等学校で、この平和の問題について話をしておりました。そして、そこである生徒諸君が手を挙げて、「先生、平和というのは今や人類の未来と同じことであるとか、それから、戦争体験とか、いろんなことをおっしゃるけれども、しかしもともと人間には闘争本能というものがあるのではないですか。そして、この闘争本能というものは、どうにもならないものであって、自然と同じような存在であるからして、いくら先生が平和だ、平和だなんてことを言ったって、しょうがないと思いませんか。」という議論を私に対してふっかけてきました。私は、実におもしろいと思ってその話を受け止めたのです。生物には、闘争本能があります。従って、戦争というものはむしろ本能的な、ごくありふれた存在であって、平和ということを考えるのは、いわば人間の本性、人間の本質というものに反するところの、ひとつの無理な内容というものを含んでいるという考え方が、潜在的

には現在でも決して少なくはないのです。最近の高等学校の諸君というのは、私から見ると、どうもぼくらのあの頃よりも少し単細胞のように思います。単細胞であるだけに言うことが非常にはっきりしていて、問題点が露呈されるわけだと思えます。

この闘争本能という考え方は、根本的にはダーウィニズムの世界に非常に深く投影している考え方です。私はそういう場面では、やはり生徒諸君と一緒に、ほんとうに生物には闘争本能というものがあるのか、あるいは、生物の社会というものはどういう成り立ちをしていて、どういうお互いの生存関係というものを持っているのか、そういうことについての勉強を徹底的にしてみたい、そういう思いに彼の発言を聞いたときにとらわれました。

実は私は、近く平和の学会があって、そこで、平和の思想と生物学的な思想との関連について、少し整理をしてみたいと思っておりますけれども、もし生徒諸君の中に闘争本能という考え方があるとすれば、それを手がかりにして、徹底的に生物学の勉強をするというのは、ひとつの平和教育ではないでしょうか。平和教育というよりもむしろ、現在の地球上における生物というものはどういうものであって、その生物の関係がどういうものであるかということをつつこんで理解をし、徹底して勉強をする必要というものがどうしても存在をします。

闘争本能ということ言えば、サルの世界に例えてみると、そこには闘争本能がむき出しに存在しているわけではなく、生態学的な関係があり、原始的であれ、ひとつの社会というものがあ、そしてその中でひとつの秩序というものがあ、お互いの承認関係というものがあ、ある安定した生活圏の成立というものが見られます。これは極めて明白なことであって、ただむやみに闘争本能があるから戦争が終わらないなどということを、若い諸君に言わせておくという必要は全然ないほど、われわれはたくさんさんの学問を今、持っているわけです。

京都大学の類人猿研究を指導してきた、先覚的な生物学者である今西錦司先生は、ダーウィンの進化学説に反対をして、それに対して、反ダーウィニズムというものを標榜して、今西進化論というものを一生懸命になって進めておられます。その今西進化論というのは、ダーウィンの言うような適者生存だとか、あるいはお互いの生存競争ということは、生物の世界には無く、生物における種の進化ということは、もし変わるべき必然性というものがあれば、その種がある時一斉に変化を遂げるという形で変わってくるのだという考えであります。ダーウィニズムに挑戦して、新しい進化論の思想というものを提案した、今西さんの進化論

の思想は、平和研究をしている人達の注意をひいています。何故かといえば、ダーウィニズムの世界は、ことによると戦争の世界、優者の独占の世界を指向しがちですが、今西先生の棲み分け理論から始まった、種の一斉の進化、変化という考え方の中には、戦いや生存競争とかいうモントは一切ないわけです。従ってこれは極めて平和的な進化論であるからです。

もうひとり、最近の日本の遺伝学者の中で、最もすぐれた仕事をしている人に遺伝研の木村先生という方がおられ、この方も進化論をやっているらしいです。この木村さんによれば、進化のプロセスというもののは偶然の積み重ねであって、決してひとつの方向へ向かったものではないという結論にだいたいなるようであります。

そういうことから始まって、われわれには闘争本能があるのかどうか、生物としての人間は、いったいどういう位置づけがあるのかという問題について、まだまだ深めなければなりませんし、深めて行けば行くほど、人間に将来はあるのか、その将来を確保するにはどうしたらいいのか、生物の世界の中でどういう未来がありうるのか、そういう展望を開くためには、実は、闘争本能あるなしということが手がかりであって、いっこうさしつかえないわけです。そこから進んで、今のわれわれの置かれている生物としての、種としての位置の認識という学問に進んでも悪くはなく、そればかりか、それは恐らく、非常に力強い人類の未来を開拓するための重要な手がかりを与えてくれるにちがいありません。私は、その闘争本能を論じた高等学校の生徒諸君には、「たいへん結構なアイデアなんだけれども、もう少し勉強して欲しい。そして、本当に闘争本能というものがあるから戦争は絶えない、ということが言えるか言えないか追求してみることは大変価値があることではないか。」という返事をして切り返したわけです。

それからまた別の機会に、ある高等学校の生徒との会に招かれていろいろな話をしました。

「平和というものは、今や人間生存の絶対的な条件になりつつあり、平和というものを疎外しているいろんなものをわれわれは勉強して、克服していかねばなりません。たとえば人口問題や食糧問題が何故起こってくるのか、どうやって理性的に解決するのかというように考えるべきであって、ドンドンパチパチということで一時その矛盾を湖塗するというのは、問題の本質的な改革にはなりません。やはり平和的にみんなを考えて、どうやってものを増やすのか、どうやって流通をよくするのか、どうやって食糧を改善するのかという、地道な努力を平和的に積みあげていく以外に将来はありません。通貨の危機についても、われわれの経

済学がもっとしっかりしていれば、防ぐことが可能であるに違いありません。貿易摩擦でも、話し合っている方がはるかに得であり、カタストロフィを避けることができます。このように、すべて理性的に進めなければならならけれども、そういう平和を疎外する要件の中に、イデオロギーというものや宗教というものがあるのです。」というようなことをちょっと生徒諸君に話しました。

また、「アイルランドの紛争は、宗教上の問題がひとつの非常に大きな要素です。それから、イランにおける状況も宗教的問題です。従って、宗教者がそれをどう考えていくかということは、大変な問題であり、カソリックが平和の問題を指向し始めたということの中にも、将来の展望というものがだんだん見えてきています。たとえば、ローマ教会は、東方教会とまず数年前にある意味で和解をし、お互いにコミュニケーションを始めました。それから、ローマンカソリックとイギリスの国教というものの間にも、両者の間でコミュニケーションができました。のみならず、世界の各国の宗教者が集まり、反核の問題を宗教者として、仏教、回教、ヒンズー教等の枠を越えて協力しようという傾向も根ざしています。宗教的対立というものは、平和を脅かすひとつの要素です。それから、イデオロギーというものも、やはり平和を脅す現在の大きな問題です。しかし、人間がお互いに考え出したこのイデオロギーというものをわれわれはやはり、理性と人間の精神というものを通じて、お互いに話し合い、理解するところをみつめて行くという必要があるのではないのでしょうか。」このようなことについても話をしたわけです。

そしたらある生徒が手を挙げて、言うには、「親父の言うのには、今や平和を脅すものは、イデオロギーの対立ではなく、国益の対立である、と言っております。イデオロギーの対立なんてものは大したものではない。国益の対立ということがやはり大事だと思っておりますが先生はどう思いますか。」とこう言うのです。私は、その時に、なるほどと思って感心しました。まず第一に、親父というものの権威を回復したなと思って感心しました。それから、親父にしては単細胞だなと思いました。

なるほど、国益というといかにも具体的なように思いますけれども、ではいったい国益とは何なのでしょう。本当の国益というのは何であるかということ、つきつめて行けば、今の世界では、私は対立にはならないと思います。つまりこれはやはり、国益を通して世界の益というものを考えながら、国を生かすという方向に行かざるを得ないことなのでしょう。国益ということ自体がアイマイな概念であって、不正確な概念です。

しかも、考えて行けば行くほど難しい概念であって、何が国益であるかということは、そう簡単には言えません。それから、イデオロギーの対立はない、と簡単に言うてしまうことも非常に危険です。確かに、哲学とかイデオロギーというものの作用が、非常に稀薄になっているということは、現在の特徴として考えられます。現在は一種の技術の時代であり、テクニカルリサーチの方向にみんなが非常に傾斜していて、そして、人間の精神とか思想とか、あるいはイデオロギーとかいうもののウェイトは、相対的に減少しているというのが、実は現在の社会のひとつの側面です。だから、イデオロギーが問題にならないというその発言も決定的を射ていないことはありません。ある一面というものを確かに衝いています。しかし、イデオロギーがまったく問題にならないかといえば、やっぱりそうではありません。たとえば、なぜ北朝鮮と韓国とが、38度線を境にして対立しなければならないかといえば、これは、政治状況と政治的イデオロギー以外の要素ではないと考えられます。また、西ドイツと東ドイツがどうしてああ鮮明に対立しなければならないかといえば、これまたイデオロギーの問題でないというふうに割り切ることはできません。このふたつの分裂国家は、極めて典型的に、現在の世界の中におけるイデオロギー的緊張状態というものを示しているわけです。従って、イデオロギーの対立がないということではなく、その存在を否定することはできないけれども、むしろわれわれは、イデオロギーの対立というものを、どうやってお互いにコミュニケートをして、新しい時代を作っていくかということが問題なのです。

やはり、私達は、今なおイデオロギーとはどういうものであって、それに対してわれわれはどう考え、どう対処し、そしてもし、それが平和を疎外する条件になるとすれば、その克服というのはどうやって考えて行くのか、言い換えれば、人間の思想の問題、精神活動の問題をもっと深める必要があると考えなくてはなりません。われわれの今の状態は、技術主義化し、物質化し、機械化し、人間の精神的主体性がどんどん衰弱をしています。そして、テクノクラシーが支配的になり、人間性が衰微をしています。イデオロギー的対立がなくなったように見えるのは、その反映にすぎず、イデオロギーにおける根本的対立、根本的矛盾というものが、論理的に人間精神の問題として解決されているわけではありません。恐らく次の時代のひとつの重要な問題は、これだけ機械化し、文明化した社会をどう乗り切るかという中で、人間の主体性を強化しなくてはならないということでしょう。それが、本質的な意味で人間生存の将来というものを開拓していく、非常に大きなポイントになるだろう、というふうに考え

ざるを得ないのです。

少し前に、分子生物学をやっているフランスのモノーという人が、『偶然と必然』という本を書き、その中のモノーの考え方というのは、結局人間は、宇宙の中の偶然的な、つまらない存在であって、その人間の運命に対して、誰も別に関心を持っているわけではないということなのです。それは言い換えれば、そういう精神的イデオロギーの面での一種のアナキズム、無政府状態が人間社会の中にあり、それをただわれわれは、物質的生活によって代償させているにすぎないというように見ることもできるわけなのです。

教育というものを考える場合に、こういう状態をどう見るか。教育というものは、実際の社会の中で生活をして行く力と知恵と技術を与えることであり、それは大切なことです。しかし同時に教育には昔から、人間のあるべきものを引っぱり出す、与えられている人間性をフルに開花させるところに、ひとつの夢と希望を託していました。その子供の間人としてのあらゆる可能性を引っぱりだすところに、教育の楽しみ、おもしろみがあり、教育者の生きがいがあったわけです。ただ子供達を物質的社会体制の中によく適応できるようにすることだけが、われわれの考えている教育ではなかったはずで、とすれば、平和における人間精神、人間のイデオロギーの問題、これをどう考えていくかということも、教育の本質的な関心と別のところにある問題ではないと考えなければなりません。

平和ということ、漠然とあらゆる問題の中に漫然と解消してしまうということは決していいことではありません。しかし、われわれが本当にまじめに考えて、われわれの日本や世界の将来にいったいどういう可能性というものを作っておいてやらなければならないかということを考える場合に、平和というものは絶対的な条件です。そして、絶対的条件としての平和の問題を追求し実現をするということの本質は、われわれが教育ということばで理解している人間の営みと、根本的には少しも違わないということです。

逆に言えば、教育のあるべき姿、教育の原点というものは、いつもそこに立ち返ってわれわれ自身が検討を加え、若い人に対しても、人類の課題に対する積極的なチャレンジというものを、敢然としてできるような、そういう意欲と力をぜひ与えてやりたい、ということでございます。

お役に立ったかどうかわかりませんが、与えられました演題に即しまして、最近考えていることを少し申し上げました。どうもありがとうございました。

(文責 高橋)